研究区分	教員特別研究推進　地域振興

研　究 テーマ	回復期リハビリテーション病院における認知症高齢患者に対する 身体抑制回避プログラム開発の一考				
研究組織	代　表　者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	飯塚　真樹
	研究分担者	所属・職名	看護学部・准教授	氏名	成瀬　早苗
		所属・職名	看護学部・助教	氏名	宮澤　典子
		所属・職名		氏名	
	発　表　者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	飯塚　真樹

講演題目

諸外国における高齢者への身体抑制廃止に向けた研究の動向に関する文献レビュー

研究の目的、成果及び今後の展望

身体抑制は「一時的に該当患者の身体を拘束し、その運動を抑制する行動の制限」で、患者の安全保持を理由に現在も医療現場で実施されている。日常生活動作レベルが低く、認知機能低下を有する高齢者は身体抑制を受ける割合が高いが、身体抑制は対象者の怒り・不安の助長、自尊心の低下、受傷のリスクが高まるという問題が指摘されている。現在、日本において 90%以上の病棟で身体抑制が実施されているとの報告がある。特に回復期リハビリテーション病院は脳血管疾患、骨折による健康障害をもつ高齢者の入院が大多数であり、日常生活動作、認知機機能が低下した高齢療養者に身体抑制が用いられやすい。回復期リハビリテーション病院は急性期を経過した患者が在宅療養への移行を目指し、体調管理とリハビリテーションを受けられる機能をもち、病床数は増加し続けている。回復期リハビリテーション病院を含めた医療機関の看護師も身体抑制実施に葛藤しているが、減らない現状を踏まえ、諸外国の身体抑制の回避・中止に向けた取り組みに関する文献検討を行うこととした。本研究の目的は「高齢者への身体抑制の回避・中止を目指した諸外国の取り組みに関する文献レビューを行い、日本における高齢者への身体抑制の回避・中止に関し示唆を得ること」である。

研究方法は文献検討で、医学文献データベース PubMed を用い、「Physical restraint」「Elderly」「Older」を検索キーワードとし、過去 10 年間における英語論文検索と、ハンドサーチした英語論文を分析対象とし、最終的に 17 文献が分析対象となった。研究方法は「介入研究 7 件」、「システマティックレビュー、メタ分析、統合的文献レビュー7 件」「観察研究 3 件」であった。研究内容は「身体抑制の実態調査」、「職員・患者を対象とした教育プログラム実施」であった。諸外国においても、転倒予防を目的とし高齢に身体抑制を実施しており、高齢者ケアを実践する看護師は高齢療養者の安全と尊厳を確保するため葛藤をもっていた。職員への教育プログラムは身体抑制回避に効果的であるが、外部のコンサルテイングを組み込むとより効果があることが示唆されていた。病院・施設は、国や専門機関のガイドラインに基づき独自の身体抑制の方針・実施手順を作成しているため、国、専門機関は時代の状況に合わせ適宜ガイドラインをアップデートすることが望ましい。在宅療養高齢者に身体抑制を実施しているケースでは外部者のモニタリングがされにくく、尊厳を保ち安全に実施されているか懸念されていた。我が国は在宅療養を推進しており、在宅療養高齢者は増加することが見込まれるため、病院施設以外で実施される身体抑制についても視野を広げる必要が示唆された。本研究は 2022 年度日本看護倫理学会学術第 15 回年次大会にて示説発表を行った。